The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ラスキンにおける美の観念とプラグマティズム : パース現象学から見る色彩と形態の相関性
Author(s)	橘高, 彫斗; 三好, 恵真子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2016, 42, p. 369-386
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57246
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ラスキンにおける美の観念とプラグマティズム
―パース現象学から見る色彩と形態の相関性―

橘　高　彫　斗・三　好　恵真子

目　次

１．はじめに
２．一次・二次性質に基づく色彩観
３．色彩と形態の相関性と固有価値
４．パース現象学から見る美の観念
５．結論

大阪大学大学院人間科学研究科紀要 42;369-386（2016）

ラスキンにおける美の観念とプラグマティズム
―パース現象学から見る色彩と形態の相関性―

橘　高　彫　斗・三　好　恵真子

1．はじめに

筆者らは、生活を取り巻く自然環境および文化的財の保護において、自然および文化が有する固有の価値の受容過程を明らかにすることが重要と考え、主に文化経済学の観点からこれらを考察してきた。その際に我々は、自然および文化における「固有価値」の存在とその保全を唱えた 19 世紀イギリスの美術批評家、経済思想家であるジョン・ラスキンの思想を重視し、以下に概説するように種々の切り口から検討を試みてきた [1)]。

まず、ラスキンにおける価値の「受容能力」の概念が機能主義的特徴 [2)] を有することに着目し、人間を含めた生物全般と環境の機能主義的な関係性を説明する試みとして、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの提唱した「環世界」の概念を用い、受容能力概念との類似性および差異について検討した [3)]。続いて、自然および文化の固有価値を供給する母体として、経済的な資本の概念に基づく「文化的自然資本」を想定し、これと受容能力との関係性について改めて機能主義的観点から検討すると共に、この観点を図式化した「膜モデル」（図 1）を提案して、独自の説明を試みた [4)]。

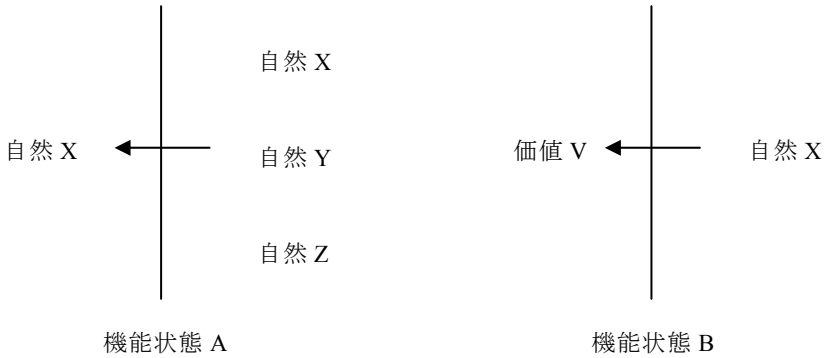

図 1. 膜モデル

他方、文化的自然資本としての風景と固有価値論との関係、さらに経済的価値概念としての効用と固有価値論との関係を踏まえた上で、記号学の観点から改めて固有価値論を説明する試みとして、チャールズ・サンダース・パースの記号学を取り上げると共に、

この記号学的観点から見直した改良型の「膜モデル」（図 2）を提示した [5]。

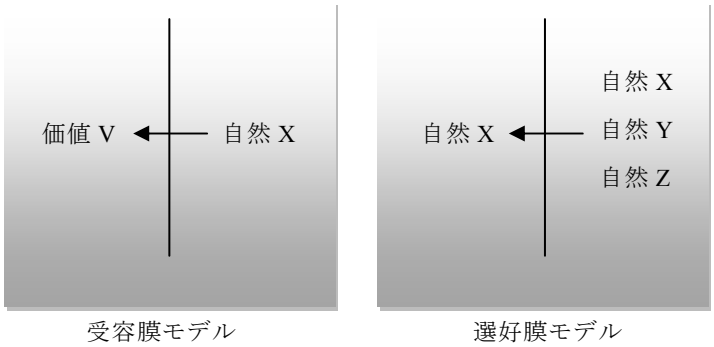

図 2. 膜モデル（改良型）

こうした研究の変遷を経て、我々は、固有価値論における価値受容の過程が、目的論的な推論過程としての「アブダクション」であることをパース記号学の観点から明らかにし、それを踏まえた上で、固有価値論と効用概念との相違点を明確化するため「記号学的膜モデル」（図 3）による図式化を行なった [6]。

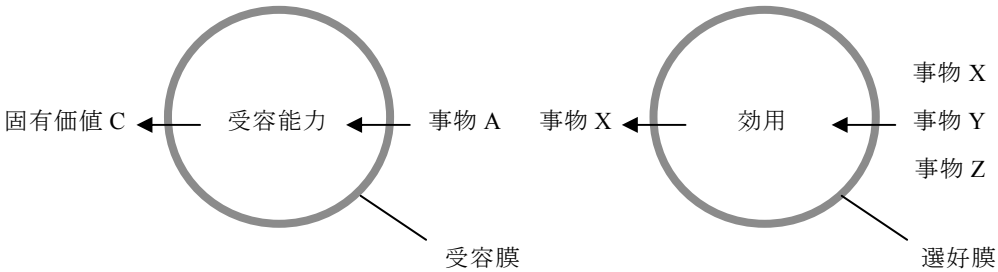

図 3. 受容膜モデル（左）と選好膜モデル（右）

その後、我々の関心は、固有価値論における価値受容の過程を認識論的 [7] に考察する視点から、固有価値そのものと受容能力との関係性を存在論的 [8] に検討する視点へと移ってきている。その一端として、ラスキンの建築論を取り上げることにより、文化的な固有価値を有していると考えられるロマネスクおよびゴシック建築が、その価値の要素として、柱や階層の間隔に見られる比例の法則性や、そこから逸脱する特殊性を持つことに着目し、これをパースの現象学の観点から検討した [9]。

一連の研究の中で、本稿は、引き続きパース現象学に基づきながら、固有価値を有すると考えられる絵画芸術における色彩と形態の相関性に着目し、色彩表現に関する理論の妥当性をラスキンがどのように確定しているかを検討していきたい。本稿で色彩を取り上げる理由は、色彩が、絵画芸術の有する価値を体現する実在論的な性質となり得ると同時に、色彩も価値も共に、事物に内在する客観的な性質であると認めるには幾分主

観的な傾向が強い観念論的な側面を持つからである。またそれ故に、色彩理論ないし価値受容の妥当性を確定する上では、何らかの指針を想定する必要があると考えられたからである。

ラスキンは、後述するジョン・ロック[10]の一次・二次性質の概念に依拠しながら色彩について考察しているが、これは上記のような色彩と価値をパラレルにとらえる観点をもたらすものである。しかしラスキンは最終的に、ロックの観点を離れ、「美の観念」および「相関の観念」を用いて妥当性を確定している。このことは、ロックの経験論的認識論を超えた、いわば「プラグマティズム的な究極目標」が、色彩理論、ひいては固有価値の受容の妥当性を確定する指針となることを示したものと我々は理解している。なお、ラスキンの色彩観に言及した先行研究としては、構想的な色彩観のもたらす芸術の総合性がロック的な認識論により変容を余儀なくされた点を指摘した Landow(1971) や、色彩観における象徴性の観点を指摘した Hewison(1976) が挙げられるが、その妥当性に関する議論は展開されていない。こうしたことから我々は、ロックの観点の持つ限界をニュートンおよびゲーテの色彩観から検討すると共に、ラスキンにおける美の観念がプラグマティズム的な究極目標に相当することについてパース現象学の観点から明らかにすることを本稿の目的とする。

ところでロックは、事物の内に実在し、かつ知覚主体の反応を直接的に触発するような性質を「一次性質」と呼び、そうした事物の性質によって触発される反応を「観念」と呼んでいる (Locke, 1690)。この定義にしたがうならば、色彩は観念と呼ぶには幾分直接性を欠くような、その原因であるはずの一次性質との関係性が不確定な反応と言える。例えば、あるものに認められる青や黄という色は、事物そのものが青や黄であることを示しているのか、それともそのように見ている人の中にのみあるのかというように。こうした色、音、味など、観念との関係性が不確定な事物の性質を、ロックは「二次性質」と呼ぶのである (Locke, 1690)。

このことからラスキンは、二次性質における「この不確定さが色彩の曖昧さと重要性の低さを示す」とし、それに対して一次性質は「本体と結合した最も重要な真実」であると評価している (Ruskin, 1846)。そもそもラスキンの関心事は、どのような「事物本体の特性」が絵画芸術の作者や鑑賞者のうちに美の観念を生み出すかであり、その視点から一次・二次性質を解釈している。しかしながら、ロック自身が一次・二次性質について、このような優劣を与えているとは考えられない。そこで本稿では、まず第 2 章において、このロックの一次・二次性質に基づく色彩観について考察する。続く第 3 章では、こうしたロックの観点から超え出たラスキン独自の色彩理論を取り上げ、それが美の観念および固有価値とどう関わるかについて検討する。これらを踏まえ第 4 章では、美の観念とプラグマティズム的な究極目標との関係についてパース現象学の観点から検討する。最後に第 5 章において結論を述べることとする。

2．一次・二次性質に基づく色彩観

ラスキンは『近代画家論』第 2 巻 (Ruskin, 1846) で、絵画表現における色彩や形態、その鑑賞における美の観念について論じているが、そこで重視しているのは「事物本体の特性」すなわち形態である。この形態に比較して色彩の重要性がどれほどかを論ずる上で、ラスキンはロックの一次・二次性質の概念を用いている。ロックは、一次性質について次のように述べている。「物体がどんな状態であれ、物体からまったく分離できないようなもの、物体がどんな変更･変化を受けようと、どんな力が物体に加えられようと、それらを通じて物体が不断に保有するようなもの」、すなわち物体から決して取り去ることのできない「固性・延長・形・可動性」であると (Locke, 1690)。そして、こうした性質が人のうちに生み出す「固性、延長、形、運動あるいは静止、数」などの直接的な観念を「単純観念」と呼んでいる (Locke, 1690)。

他方､「色､音､味」など「一次性質によって､すなわち､事物の感知できない部分のかさ･形・組織・運動によって、多種多様な感覚を産む力能であるにすぎないような性質」を二次性質と呼んでいる (Locke, 1690)。つまり、それ自体は一次性質であるものの、感知できないような「さまざまなに運動するさまざまな形･かさ･数のこうした分子」として、「私たちの各種の感官を感発して、私たちのうちに物体の色や匂いからくるさまざまな感覚を産む」と想定される性質である (Locke, 1690)。したがって二次性質は、「事物自身にあっては多様な感覚を私たちのうちに産む力能にすぎず、前述のように事物の一次性質、すなわち部分のかさ・形・組織・運動にもとづく」ものであり (Locke, 1690)、いわば推論による以外にはそれが一次性質に起因することを確信できない性質ということになる。

こうしたロックの見解に対して、一次性質と二次性質は共に主観的相対的なものであり、両者の区別に大きな意味はないとする批判が一般的に定着している（青木 , 2002）。しかしながら、ロックにおける二次性質は、知覚主体の持つ観念との関係性が不確定という点においてのみ一次性質から峻別され、実体は一次性質そのものと言ってもいい性質である。つまりロックは、知覚主体の心の中にある観念が、それを生み出す事物の中にある性質と強固に結び付いている点を強調し、その意味で二次性質にも一次性質と同等な観念との結び付きを想定し得ることを示したと考えられる。本来ロックが区別していたのは、こうした観念と性質との結び付きを単に主観的な知覚現象ととらえて探究する立場と、むしろ観念の外に客観的な事物の性質が実在すると見なして両者の結び付きを「自然学」的に推論する立場との違いである（青木 , 2002）。したがって、ロックの一次・二次性質は、主観的相対的な視点を超えた、客観的自然学的な視点から事物をとらえるためのいわば仮説と見るべきだと我々は考えている。

例えばロックは、斑岩における赤と白の色について、この視点から考察を加えている。今、岩に光が当たらないようにすると、「色は消えうせる。岩はもはや私たちのうちに色

の観念をすこしも産まない」が、再び光を当てると、「岩は色の現象を私たちのうちにふたたび産む」のである (Locke, 1690)。ここでロックは、「光の在不在」が斑岩に何らかの性質的な変化をもたらすのだろうかと問う。確かに、「岩のある部分からはね返る光線によって赤さの観念を私たちのうちに産み、他の部分からは白さの観念を産む適性のある分子配置を、岩は昼も夜ももっている」と言える (Locke, 1690)。しかし、岩自体には「どんな時にも白さや赤さはなく、ただそうした感覚を私たちのうちに産む力能をもつ組織がある」に過ぎない (Locke, 1690)。この「力能」が、色の観念を生み出す二次性質ということになる。つまり、二次性質そのものが主観的観念であると述べているのではなく、主観的観念の原因となる客観的な性質が事物のうちに実在し得るという視点を表明している。

こうした自然学の視点に基づき、ロックと非常によく似た姿勢で光および色について考察しているのはアイザック・ニュートン[11]である。ニュートンはプリズムを使った実験において、プリズムを透過させることで屈折する射線（太陽光）の像、すなわちスペクトルに、その屈折性の度合いに応じた「固有の色」が現れることを指摘した (Newton, 1704)。それは、「最大屈折性の射線が落ちた一端」から「最小屈折性の射線が落ちた他端」まで進むにつれて、「菫、藍、青、緑、黄、橙、赤およびそれらの中間のすべての色の一連の色に彩られて、たえず変化する連続的系列として現れた」のである (Newton, 1704)。しかし、その直後にニュートンは、自身が述べた「光や射線に色がある」という表現について、「それは哲学的にまた厳密にいっているのではなく」、「厳密にいえば射線には色はついていない」と指摘し、射線には「あれこれの色の感覚を惹きおこすある能力と性向があるだけ」だと言い直している (Newton, 1704)。つまり色は、事物として射線に付随するものではなく、ニュートンによれば、感覚中枢にある「色という形態でのこれらの運動の感覚」とされる (Newton, 1704)。この色の感覚を生み出す「能力」と「性向」は、ロックにおける「力能」および「二次性質」にほぼ対応する概念と見て差し支えないだろう。

このように、ロックおよびニュートンは、二次性質の含まれる光や射線についての自然学的な説明を重視し、それによって生み出される色の観念ないし感覚にはほとんど触れていない。これに対して、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ[12]は、むしろ色の観念や感覚にこそ、色の実体を明らかにするような普遍的法則性があるとの立場を取っている。ゲーテは、ニュートンのプリズム実験に触発されて自らもプリズムを用いた実験を行ない、やはり自然学的な視点を重視したのであるが、しかしその関心は色の原因である事物にではなく、知覚主体における色の現れ方に向けられた。このことはゲーテのプリズム実験の方法にも現れている。ニュートンの実験では、小径の光線をプリズムに透過させて出てくる分光スペクトルの投影像を観察していたが、ゲーテはプリズムを通して、明るい面と暗い面の境界部分に現れる分光スペクトルの像（境界色）を直接観察したのである（図 4）。

図 4. ニュートンの実験（左）とゲーテの実験（右）

プリズムを通して見る明るい面は、いわば幅の広い光線として分光されるが、そのスペクトル像は特に暗い面との境界部分に現れる。ゲーテはこれを、「明るいまたは暗い対象と明確に仕切られる縁のところで有色の現象を認める」と言い表している。ゲーテはこの観察を敷衍する形で､光と闇に対する「媒質」の作用によって色が生じるという仮説、ゲーテが言うところの「根本現象」を提示している。例えば、「光をほんの少しでも曇った媒体を通して眺めると黄色に見え」、その「媒体の曇りが増すか、その濃さが増大するならば、光はしだいに橙色を帯びる」とし、また、「光に照らされた曇った媒体を通して闇を見ると青い色が現れ」、その「媒体の曇りが増せば増すほどますます明るく淡く」なるとしている (Goethe, 1810)。こうした、色の感覚的な特性を探究する視点は、事物の性質に着目するロックやニュートンに見られないものである。

根本現象において最初に生じる色は、光と闇の対立、すなわち「分極性」に対応した黄と青の対立であるが、ここからゲーテは、分極性がその合一へと運動する色自体の「高進性」や、知覚主体の眼が要求する「反対色」ないし「補色」について考察を進める。黄と青は、一方では橙と紫を経て深紅に合一され、他方では緑に合一される。そして、これら六色は相互に補色の関係を保ちながら、最終的に「色相環」の形で全体性を獲得するのである。ゲーテは、「色相環はわれわれの眼前に出現し、生成変化の多種多様な関係はいまや明瞭となる」と述べている (Goethe, 1810)。このように、色の感覚そのものに対して積極的に仮説を当てはめ、そこに色相環のような確定的な法則性を見出すゲーテの姿勢は、二次性質に従属的なものとして色を理解するロックやニュートンの色彩観から脱した、知覚主体自身の体験に基づく「生理的色彩」という目的論的な色彩観を示したものと我々は考える。『近代画家論』においてラスキンが頻繁に取り上げている J･M･W・ターナー [13] は、このゲーテの色彩論から影響を受けた、色彩表現に長けた画家として知られるが、ラスキン自身はこうした色彩に関する理論の妥当性をどのように確定していたか次章において検討していく。

3．色彩と形態の相関性と固有価値

前章で見たように、ロックにおいて色、音、味などの観念は、それを生み出す一次性質との結び付きが明確ではないため、そうした不確定な結び付きに対応する性質として二次性質ないし力能を想定する。ラスキンは、こうしたロックの見解を踏まえて、「色彩のすべての真実は第二の地位に落ちる」と述べている (Ruskin, 1846)。ラスキンによると、容積、形象、数などの一次性質は、「その特質が先天的である本体についてだけを特徴づけるので、本体と結合した最も重要な真実である」が、二次性質である「色彩は対象物をあまり重要でないものとしてしか特徴づけない」のであり、「色彩の真実のために形態の真実を軽視する人は、卑小な真実のために偉大な真実を軽視する」とも評価される (Ruskin, 1846)。

例えば、同種の二本の樹木におけるように、「色彩は同種の二つのものを区別し得るものではない」が、二つに砕いた岩石の場合、「形態は種属を主に特徴づけるだけでなく、一つの種属の個別性の唯一の特徴である」と指摘する (Ruskin, 1846)。また、「万物の色彩も、それに降りかかる光の特質につれて変化する」が、「対象物の天性の本質は、これらの変化から独立している」とも述べている (Ruskin, 1846)。他方、「他の色彩と連合した一つの色彩」についても、「その色彩は他の色彩との連合に依存して、網膜に明確で特殊な力を及ぼす」と指摘し、したがって「いかなる対象物の色彩も、その対象物そのものの性質や、それを見る眼には、その近くの事物の色彩に依存するほどには依存しない」と述べている (Ruskin, 1846)。

しかしながら、ロック自身は一次性質と二次性質の間に特に優劣を与えていないことからも、こうした評価は一次・二次性質自体から導かれるものではなく、ラスキン自身の思想によるものであるだろう。ラスキンにおいて、「喜びの源泉としての色彩は、形態と比較すると脆弱である」という事実は、「美の観念を考察する」過程で明らかとなる (Ruskin, 1846)。ラスキンによると、「美しい」という言葉が指示するのは、「知性を直接に明確に使わないで、外的特質をたんに凝視することで私達に喜びを与える有形の対象」であるとされる (Ruskin, 1846)。そして、そうした「喜びを受容する形態・色彩もあれば、受容しないそれらもあるのは何故か」ということにに関しては、そもそも「問うことも答えることもできない」と述べている (Ruskin, 1846)。ただし、これは「ある有形の事物を別の事物より本能的直観的に選好すること―とはまったく区別される」のであり (Ruskin, 1846)、美の観念が知性とまったく関わらないということではない。仮に、「喜びの源泉」として何らかの思想を示せるならば、その人は「美の観念以上のものを受容した」のであり、それは「知的能力」の活動と結び付いた喜びの源泉としての「相関の観念」なのである (Ruskin, 1846)。

この相関の観念によって色彩および形態を考察する時、両者の微妙な結び付きが見えてくる。形態は輪郭に関係するものと通常考えられやすいが、ラスキンによると、形態

は「光と陰影を必然として暗に含んでいる」のであり、色彩の現れ方と無関係とは言えない。ラスキンは、さらに以下のように述べている。

> 明暗なしで少しでも眼が認識できるものなどあり得ない。それゆえ、形態を風景の一要素として一般的に論じる場合に、私が言いたいのは、光と陰影との輪郭の完全で調和のとれた統合である。その統合によって、一つの身体のすべての部分、突出部、均衡は、眼にとって十分な説明となるが、それでもやはりそれらは他の事物においては視覚や能力から完全に独立している。身体へおよぼす光の存在は、私たちがそれを自覚しようがしまいが、実際に確認できる存在であり、けっして私たちの感覚に依存しない。（Ruskin, 1846[1903]=2003, p.161, 86 頁）

つまり、明暗は、光と色の現象に属するものであるが、同時に、事物の形態を表す客観的な性質とも言えるのである。自然を観察する者にとって、「正確な色合いを彼らが決定することはほとんどできない」が、「光と陰影で語られる形態は、いつも決断され、自明であるし、あらゆる事物の主要な性格を示す源泉になる」(Ruskin, 1846)。そして、「光と陰影があまりに完全に局地的色彩の区別を征服するので、白い物と黒い物の照らされた部分間の色合いの相違は、いずれかのそれぞれ別個の光った側面と暗い側面の間の相違ほど大きくはない」のである (Ruskin, 1846)。

こうした相関の観念による色彩と形態のとらえ方は、さらに絵画における色調の議論へと発展していく。ラスキンにおいて色調とは、絵を構成する対象物の遠近に応じて浮き彫りにされる、「絵の主要な『明』の部分に対するすべての対象物の『影』―それが空、水、その他のいずれであれ―の完全な関係」であり、それと同時に、「『明』の色彩に対する『影』の色彩の完全な関係であって、『影』の色彩は『明』の同色の色彩の度合いが異なる」ものである (Ruskin, 1846)。つまり、絵画作品全体に亘って統一されている明暗の関係性（いわゆる明度）と、その明暗に依拠した色彩相互の関係性（いわゆる彩度）である。この統一された関係性は、特に「明」の色彩によって影響を受け、「一種類の『明』や一種類の雰囲気の下にある一つの風土になっている」とされる (Ruskin, 1846)。

形態は、「種属を主に特徴づけるだけでなく、一つの種属の個別性の唯一の特徴である」とラスキンが述べていることからしても、対象物の距離の違いによって形態を顕わにする色調表現は、個々の対象物を個別化するように可能な限り細かく段階的に用いなければならないだろう。ターナーは、この作業を徹底して推し進めた画家であるとラスキンは評価している。そして、「彼はあらゆる度合いの陰影が個別的な度合いの距離を表わすようにし、描く対象物への接近のそれぞれの段階を示した。これによって、自然の中で陰影が表わす度合いの相違ではなくて、可能な限りの陰影の総体が自然の陰影の総体に対して有する相違に釣り合った割合の相違を示した」と述べている (Ruskin, 1846)。

以上見てきたように、美の観念ないし相関の観念を指針とすることにより妥当な絵画

表現としての色調を見出すことは、絵画という事物に内在する性質としての、いわば価値の要素を受容する過程ととらえていいだろう。それはつまり、価値という主観的観念を生み出す原因が、事物本体の性質ないし力能として実在するということでもある。ラスキンはこれを「人の生を支持すべき絶対的力」すなわち固有価値 (intrinsic value) と呼ぶのであるが (Ruskin, 1872)、こうした価値は、「人の思惑とかものの量には無関係」であり、「使用されると否とを問わず」ものに内在する、生を強める不変的な力、すなわち「ヴァロール (valor)」とされる (Ruskin, 1862)。この力 (power) ないしヴァロールの概念は、そのままロックにおける力能 (powers) に対応させられるものだろう。例えばそれは、「一束の小麦」の持つ「人体の実質を保持する一の計量可能な力」であり、あるいは「清浄な空気」の持つ「人間の体温を保持する一の固定した力」、あるいはまた「一定の美しさの一群の草花」の持つ「諸感覚および心情を鼓舞し活気づける一の固定した力」とされる (Ruskin, 1872)。

このようにラスキンの固有価値思想において、価値とは事物に内在する性質もしくは「力」であり、それ故に、力の作用に応じて人間は事物の価値をごく自然に、正常に「受容」することになる。ただし、そうなるためには「それを受けとる者の側において或る状態が必要」であり、例えば「食物・空気或いは草花が人間に十全の価値あるものとなりうるに先立って、人間の消化機能・呼吸機能・知覚機能が完全でなければならぬ」とされる (Ruskin, 1872)。こうした人間の機能の完全性をラスキンは「受容能力」と呼んでおり、事物の力能と人間の能力が完全に符合することにより、いわば直接的に価値は顕在化するというのが、ラスキンにおける価値受容の過程の特徴と言える。この受容能力こそが、美の観念および相関の観念であると見なすことができる。

4．パース現象学から見る美の観念

本章では、受容能力としての美の観念が、二次性質としての色彩と一次性質としての形態を統合させる上での指針となっていることについて、パース現象学の観点から説明を試みる。パースは、プラグマティズムの創始者として、また記号学の創始者の一人としても知られているが、パース自身はプラグマティズムを「諸概念の意味を確かめる方法」ととらえている（米盛 , 1981, 209 頁）。ただしその諸概念の意味は、未来においても一般性を持つような「実際的結果」でなければならず、またそれ故に、実際的結果をもたらすような一般性を持つ行動様式が「習慣」として形成される（米盛 , 1981, 216-220 頁）。一般性とは、いわば法則的なもののあり方であるが、そうしたものは、例えばロックの言う一次性質のようには直接的に知覚することができない。法則的なものは、何らかの条件の下で「実験」によってしか確かめることができないのであり、パースにおける実際的結果は、そうした実験的手続きを経て得られた科学的根拠を持つ結果と言える。

第 2 章で見たように、ニュートンの実験は、色の感覚の原因である二次性質を明らか

にするものであり、他方ゲーテの実験は、色の感覚そのものに目的論的な法則性を見出すものであった。これらに対してラスキンは、ニュートンおよびロックの見解を自明の原理と見なした上で、色彩を用いた絵画表現の法則性についてパース的な意味で実験を行なったと言える。ラスキンは、不確定な二次性質としての色彩を一次性質としての形態にいわば仮託させることで、両者の統合された色調という第三の確定的な絵画表現を提示した。この色調は、妥当な絵画表現を説明するための仮説であり、それが特にターナー作品において妥当することを、クロード・ロランやニコラ・プサンなど他の絵画作品とも比較しながら論証している。したがって色調は、絵画表現における実際的結果、もしくはその候補と見て差し支えないだろう。ただし、実験的手続きが行なわれたとしても、最終的に仮説を確定する際には、やはり何らかの信念がなければならないと考えられる。パースは、信念を固める上での究極目標として、「美的善」ないし「最高善」を想定しているが（高見 , 1982）、ラスキンにおいてはそれが美の観念であったと我々は考えている。美の観念は、何故そうした観念を持つかについて、それ以上「問うことも答えることもできない」ものである。

パースは、諸科学の基盤となる哲学を、現象学、規範科学、形而上学に分け、さらに規範科学を美学、倫理学、論理学に分けている（米盛 , 1981, 51-53 頁）。これら三つの学問は、まず美学の持つ目的性が倫理学を基礎付け、次にその倫理学の持つ目的性が論理学を基礎付けるという関係性にある。したがって、各々の目標である美的善、倫理的善、論理的善の中でも、最も基盤となる美的善こそが究極的な最高善となる。なお記号学は、これらのうち論理学に含まれるものとされる。こうした性格付けは、じつは現象学におけるカテゴリーの概念に基づいているのであるが、現象学は記号学と対となる関係にあり、記号学が記号による認識の過程を扱うのに対して、現象学は記号そのものの存在論的な記述を扱うものとされる。現象とは、記号とその指示物である「心に現れるいっさいのものの総合的全体」とされ、現象学は、この記号と存在一般における最も基本的な様式ないしカテゴリーを観察し記述することを指す（米盛 , 1981, 61 頁）。パースは現象学を次のように説明している。

> わたくしが現象学 (phaneroscopy) と称しているものは、現象の直接観察に基づき、その観察を一般化することによって、現象のいくつかの非常に広いクラスをはっきりと目立つようにし、そのおのおののクラスの諸相を記述し、しかしそれらの特性は全く異なっていることが明白であることを示し、そしてある非常に短い表でもって現象のもっとも広いカテゴリーを包括し得ることを疑問の余地なく立証し、最後にそれらのカテゴリーの主な小分けを枚挙するという骨の折れる難しい課題に進むような、そういう研究である。（Peirce, 1931[1994]=1985, Vol.1, sec.286, 2 頁）

クラスもしくはカテゴリーには、第一次性、第二次性、第三次性の三つがある[14)]。第一次性は「積極的にしかも他のいかなるものとのかかわりも持たず、それ自身であると

いうようなものの存在様式」、第二次性は「そのものが、ある第二のものと関係はしているがいかなる第三のものとも無関係に、それ自身であるというようなものの存在様式」、そして第三次性は「ある第二のものと第三のものを相互関係にもたらすことにおいて、それ自身であるというようなものの存在様式」とされる (Peirce, 1958)。特に第三次性は、第二次性と第一次性を含むより一般的なクラスとされ、その特性として、記号性、思想性、法則性、一般性、連続性、習慣的性格、条件法的性格、統合性、合理性の七つが挙げられる（米盛 , 1981, 79 頁）。例えば記号性は、記号とその指示物との間の媒介性ないし中間性を意味する（米盛 , 1981, p.79）。パースにおいては記号も現象学的なカテゴリーによって分類される。パースは、記号の機能について以下のように述べている。

> 記号は本来三つのものと関係をもつ。（一）まず記号は何らかの「思考」によって読みとられる。（二）つぎに記号は、思考によってその記号と等置されうる何らかの「対象」の代理をつとめる。（三）最後に記号は、何らかの「材質」をまとってその対象と接触する。（Peirce, 1934[1994]=1980, Vol.5, sec.283, 142 頁）

上の（二）における対象の代理 (sign for some object) とは、記号に特有の「表意」と呼ばれる機能であり、この記号的な作用ないし記号の過程 (semiosis) を導き出す形で、「材質」の存在様式、「対象」の表意様式、「思考」の言明様式という三つの局面が定義されている（米盛 , 1981, 109-110 頁）。これら存在、表意、言明の各様式は、それぞれ第一次性、第二次性、第三次性に分類され、さらに言明様式は、単なる可能的言明である「名辞」、対象を明確に指示するが、その解釈内容は不定のままとする「命題」、対象も解釈内容も共に明確に決定する「論証」に分類される（Peirce, 1932, 米盛 , 1981, 160-171 頁）。パースにおいて、「論証というのはその解釈項にとっては常に類比的な論証の一般クラスに属しており、このクラスは全体として真理に向かうものと理解される」のである (Peirce, 1932)。

このように、パースにおいて推論は、論証という形式に基づく記号の過程と解され、それ自体が現象学的なカテゴリーの対象となる。プラグマティズム的な実際的結果を導き出す行動様式も、具体的には言明様式の第三次性としての論証を指すと言える。論証はさらに「演繹、帰納、アブダクション」に分類され、特にアブダクションは、ある事実を説明するための理論ないし仮説の提案を促す「発見の方法」として最も重視される。パースは、帰納が「大前提を導き出す推論である」のに対して、アブダクションすなわち仮説（推定）は「小前提を他の二つの命題から導きだす推論である」としている (Peirce, 1934)。さらに、その推論過程として、「驚くべき事実 C が観察される、しかしもし A が真であれば、C は当然の事柄である、よって、A が真であると考えるべき理由がある」という形式を提示する (Peirce, 1934)。これは、もし仮説 A で事実 C をうまく説明できなければ、新たに仮説 B を提案し、それでもうまく説明できなければ、さらに別の仮説

を立てて事実 C の説明を試みるものである。

これについてパースは、「事実について考えられ得る説明は厳密には無数にあるだろう」としながらも、「しかしわれわれの精神はある有限回の推測でもってそれらの事実に関する唯一の真なる説明を考え当てることができるであろう」とする (Peirce, 1958)。こうした、論証を自己承認する姿勢は、パースによると「自然的原理」に基づく意図的行為であり、それは規範的、すなわち道徳的な承認であるとされる。パースはまた、推論により「合理的に採択された―行為の究極的目的」は、「賞賛すべき理念でなければならず、それはそのような理念が有し得る唯一の種類の正当性―すなわち、美的正当性―を有する」とも述べている (Peirce, 1934)。つまり推論は、それ自体が規範であり、かつ目的でもあり、またそのことは「美的正当性」(esthetic goodness) すなわち、それ自身を賞賛するところの美的善により根拠付けられるのである。

パースのカテゴリー論によれば、美学は第一次性に、倫理学は第二次性に、そして論理学は第三次性に分類される。つまり、美学領域の目標である美的善は第一次性に属するのであり、言明様式として見るならば単なる可能的言明としての名辞、あるいはそれ自身で完結する情感とも言えるだろう。したがって、信念を固める上での究極目標は、結果的に第一次性としての情感や単なる快苦に還元されることになる。しかしながらパース自身は、こうした情感を、美についての直接的な快苦ではなく「美的享受」ととらえ、第三次性としての一般性により修正され習慣化された「一種の知的共感」ないし「合理的な情感」と見ている (高見 , 1982)。この点が、功利主義的な効用と異なる、プラグマティズムの特徴となっていると考えられる。ラスキンは、色彩表現の妥当性を確定する上で、色彩と形態の統合された色調の理論を提示したのであるが、こうした実際的結果を導き出す推論過程こそがアブダクションであったと我々は考えている。そして、その過程で指針とした美の観念は、プラグマティズム的な究極目標として位置付けることができると考えられる。

5．結論

本稿では、固有価値を有すると考えられる絵画芸術における色彩と形態の相関性に着目し、色彩表現に関する理論の妥当性をラスキンがどのように確定しているかをパース現象学に基づきながら検討した。特に、ラスキンが当初依拠していたロックの一次・二次性質の観点が持つ限界をニュートンおよびゲーテの色彩観から検討すると共に、ラスキンにおける美の観念がプラグマティズム的な究極目標に相当することについてパース現象学の観点から明らかにした。まず第 2 章において、ロックの一次・二次性質に基づく色彩観について考察し、続く第 3 章では、こうしたロックの観点から超え出たラスキン独自の色彩理論を取り上げ、それが美の観念および固有価値とどう関わるかについて検討した。これらを踏まえ第 4 章では、美の観念とプラグマティズム的な究極目標との

関係についてパース現象学の観点から検討した。

以上の考察により、事物との関係性の不確定な二次性質としての色彩が、絵画芸術における固有価値を体現し得るかどうかについて、ラスキンは美の観念を指針としてアブダクション的な推論過程により妥当性を確定していることが明らかとなった。さらに、ラスキンにおけるこの美の観念が、プラグマティズム的な究極目標としての美的善に類似した指針として位置付けられることが明らかとなった。

このように、自然環境や文化的財における保護すべき価値の妥当性を確定する作業は、それがいわゆる二次性質に属する以上、非常に繊細なものであると言わざるを得ない。しかしラスキンは、こうした不確定な領域に対して、美の観念というプラグマティズム的な究極目標を指針とすることにより、積極的にその確定へと進んでいったのである。このことは、現在、喪失の危機にある世界各地の自然環境および文化的財においても、功利主義的な効用に基づく帰結主義的相対的な観点を超えた、絶対的な観点から保護の妥当性を導き出す一つの根拠を与えるものと我々は考えている。今後は、ラスキンの価値思想について具体的な事例も参照しながら、より詳細な検討を進めると共に、その価値受容の過程を説明する上で我々が検討してきた記号学的膜モデルについても、さらなる改良の検討を行なっていきたい。

注

1）ラスキンの絵画論、建築論、社会経済思想に関してはラスキンの生前以来多くの研究があるが、固有価値論に関しては近年ようやく文化経済学などの領域で研究が開始されたところである。代表的なものとして Throsby(2001)、池上 (2003)、Throsby(2011) などが挙げられる。本稿は固有価値論を認識論的、存在論的な観点から考察している点で特徴的である。

2）ラスキンの固有価値論においては、価値が事物に内在するという実在論的な側面と、その価値が観念として受容されるという観念論的な側面とが両立している。この価値と価値観念との関係性は、価値受容という一つの機能状態を表しているものと我々は考え、これを Putnam(1975) などの機能主義の観点からとらえた。

3)「ジョン・ラスキンの受容能力概念について」, 日本生活学会 2014 年度研究大会 , 2014.5

4)「機能主義の観点から見る自然資本と文化的価値」, 文化経済学会＜日本＞関西支部会 , 2014.6

5)「ジョン・ラスキンの固有価値論と経済的価値概念について」, 文化経済学会＜日本＞ 2014 年度研究大会 , 2014.7

6) 以上の成果をまとめ、文化経済学会誌である『文化経済学』において公表した (橘高 , 2015)。

7)「ラスキンの建築論と自然観―パースの現象学を手がかりとして―」, 文化経済学会＜日本＞ 2015 年度研究大会 , 2015.7

8）固有価値の受容を、記号学的な推論過程による実在性の認識ととらえることを指す。
9）固有価値の受容を、現象学的なカテゴリーによる一般的な存在様式の分類ととらえることを指す。
10）ロックの一次・二次性質については、事物に内在する大きさ、形、運動などの一次性質も、知覚主体の位置や状態に依存する主観的相対的なものであるから、事物に内在しないとされる二次性質と何ら変わるところはないというジョージ・バークリーからの評価が定着しているが（青木 , 2002）、本稿では、むしろロックが事物の性質は客観的に認識し得るととらえていた点に注目して取り上げている。
11）ニュートンの光学実験について本稿では、事物の性質に関するロックとニュートンの見解の共通性を強調する形で取り上げている。
12）ゲーテの色彩論は、光の屈折率として色をとらえたニュートンに対して、色相環という知覚自体の法則性を提示した点に特徴があると考えられる。
13）ターナー(1775～1881)は､イギリスを代表する風景画家であり､ラスキンは後期ターナー作品を擁護する目的で『近代画家論』を執筆した。
14）パースのカテゴリーは、ロックの一次・二次性質のように事物の客観性を直ちに是認するものではない。事物の実在性が確定するのは、記号によってその指示物が表意される第三次性においてである。第一次性は、そもそも認識する主体も認識の対象もない、それそのものとしか言えない状態である。これを、主体の観念と対象の性質が完全に一致している状態と解釈するならば、ロックの一次性質に対応させることは可能かも知れない。また第二次性では､認識主体とその対象という対立構造が現れるが､第三のものとの関係がないため対立は不確定なままとなる。これは、ロックの二次性質における不確定さに比較的類似した状態と解釈することが可能だろう。

引用文献・参考文献

Goethe, J. W. V. (1810), *Zur Farbenlehre*, German（=2001, 木村直司訳『色彩論』筑摩書房）

Hewison, R. (1976), *John Ruskin the argument of the eye*, Princeton University Press

Landow, George P. (1971), *The Aesthetic and Critical Theories of John Ruskin*, Princeton University Press

Locke, J. (1690)[2004], *An Essay Concerning Human Understanding*, The Project Gutenberg EBook（=1972, 大槻春彦訳『人間知性論（一）』岩波書店）

Newton, I. (1704), *Opticks or a treatise of the reflections, refractions, inflections and colours of light*, London（=1983, 島尾永康訳『光学』岩波書店）

Peirce, C. S. (1931)[1994], *Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol.1*, ed. by Charles Hartshorne and Paul Weiss, Harvard University（=1985, 米盛裕二訳『パース著作集 1 現象学』勁草書房）

Peirce, C. S. (1932)[1994], *Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol.2*, ed. by Charles

Hartshorne and Paul Weiss, Harvard University（=1986, 内田種臣訳『パース著作集 2 記号学』勁草書房）

Peirce, C. S. (1934)[1994], *Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol.5*, ed. by Charles Hartshorne and Paul Weiss, Harvard University（=1980, 上山春平編「パース・ジェイムズ・デューイ」,『世界の名著 59』中央公論社 , 1985, 米盛裕二訳『パース著作集 1 現象学』勁草書房 , 1986, 内田種臣訳『パース著作集 2 記号学』勁草書房）

Peirce, C. S. (1958)[1994], *Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol.7*, ed. by Charles Hartshorne and Paul Weiss, Harvard University（=1986, 内田種臣訳『パース著作集 2 記号学』勁草書房）

Peirce, C. S. (1958)[1994], *Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol.8*, ed. by Charles Hartshorne and Paul Weiss, Harvard University（=1986, 内田種臣訳『パース著作集 2 記号学』勁草書房）

Putnam, H. (1975), *Mind, Language and Reality*, Cambridge University Press

Ruskin, J. (1846)[1903], *Modern Painters Vol. II* , The Works of John Ruskin Vol.4, ed. by E. T. Cook and A. Wedderburn, Longmans, Green and Co., London（=2003, 内藤史朗訳『芸術の真実と教育（近代画家論・原理編Ⅰ）』法蔵館）

Ruskin, J. (1862)[1905], *Unto This Last: Four Essays on the First Principles of Political Economy*, The Works of John Ruskin Vol.17, ed. by E. T. Cook and A. Wedderburn, Longmans, Green and Co., London（=2008, 飯塚一郎他訳『この最後の者にも , ごまとゆり』中央公論新社）

Ruskin, J. (1872)[1905], *Munera Pulveris: Six Essays on the Elements of Political Economy*, The Works of John Ruskin Vol.17, ed. by E. T. Cook and A. Wedderburn, Longmans, Green and Co., London（=1958, 木村正身訳『ムネラ・プルウェリス』関書院）

Throsby, D. (2001), *Economic and Culture*, Cambridge University Press（=2002, 中谷武雄 , 後藤和子監訳『文化経済学入門』日本経済新聞社）

Throsby, D. (2011), The Political Economy of Art: Ruskin and Contemporary Cultural Economics, *History of Political Economy*, Vol.43, No.2, pp.275-294

青木滋之 (2002),「ロックの一次・二次性質―バークリーの批判に答えて―」,『哲学の探求』第 29 号 , 43-58 頁

池上淳 (2003),『文化と固有価値の経済学』岩波書店

橘高彫斗 (2015),「ラスキンの固有価値論とパース記号学―固有価値の受容における推論過程について―」,『文化経済学』第 12 巻第 1 号 , 40-52 頁

高見保則 (1982),「プラグマティズムと最高善―パースの後期哲学をめぐって―」,『実践哲学研究』第 5 号 , 17-32 頁

米盛裕二 (1981),『パースの記号学』, 勁草書房

An idea of beauty in Ruskin and Pragmatism
Relativity of colour and form considering from Peirce's phenomenology

Horuto KITTAKA and Emako MIYOSHI

In this paper, the authors have been paying their attention to the relativity of colour and form in the painting art that are thought it has intrinsic value, and examining how Ruskin determined to theoretical validity about the colour expression based on Peirce's phenomenology.

By the consideration, it became clear that Ruskin determined to the validity by a process of abductive inference in an idea of beauty as a guidance about whether a colour as the uncertain secondary qualities of the relationship with things could embody in intrinsic value in the painting art. Furthermore, it became clear that an idea of beauty in Ruskin is placed as the ideal that is similar to esthetic goodness as the ultimate end in pragmatism.